「アブラハムの旅立ち」（創世記一二章一～九節）

1　内面的促し

先週から、イスラエルの父祖であり、信仰の父であるアブラハムを、学びはじめたところです。

今日の聖書は創世記一二章一節からです。一節から四節前半は、先週も取りあげました。しかし大事なところなので、もう一度触れながら、今日の箇所に入っていくことにします。

一節から四節前半で大事なことは、最初の一節と終わりの四節前半の言葉が明らかにしているように、アブラハムが、神の言葉に聴き従い、本当に旅立った、カナンの地に向かって歩み出したことです。

人にはだれにも転機となる出来事があります。それは、ほとんどいつも、過ぎてから、後から振り返って、そういうものとして思い返されるものですけれど・・・。七五歳のアブラハムのこの旅立ちが、彼の人生のもっとも重大な転機の一つであったことは間違いありません。しかもそれがすんなり簡単になされているかに見えることが私どもの何よりの驚きなのです。

何が起こったのでしょうか。森有正（1911-76）というキリスト教思想家が、これを、アブラハムは「内面的な促し」に従ったという言葉で説明したことはよく知られています（『アブラハムの生涯』教団出版局）。

アブラハムは内面的な促しに従ったのだと言うのです。しかし内面的な促しに従うというのは、決して何か自分に従う、自分の感情のままに、自分の思いのままに生きるという意味ではありません。この思想家は、別のところで、内面的な促しを説明して、自分では気がつかない形で、自分に先立つところの、すでに存在している文化が、私にある方向へ向かうオリエンテーション（方向づけ）を与えてくれることだと説明しています。

いま「文化」と言ったところを、「神」に置き換えて言えば、自分では気がつかない形で、自分に先立つところの、すでに存在している神が、私にある方向へ向かうオリエンテーションを与えてくれることであるということができます。ですから内面的な促しに従う、促しに押し出されるというのは、自分の思いのままに生きることと正反対のことです。

アブラハムは、神によって、自分の人生に、一つのオリエンテーションを与えられたのです。そうした内面的な促しに人は従うことによって、一人の個人として神の前に生きることになるのです。自分の、自分だけのかけがえのない人生を生きることになるのです。自分だけの人生ですから、それは、ある意味で孤独な人生です。だれも代わることはできない。でもそれを生きることが、人生の意味です。他人（ひと）から言われたことを、どんなに一生懸命生きても、自分の人生にはなりません。神の示す内面的な促しに押し出されるとき、人は本当の自分を生きるのです。そうしたことは、まさに今日につながる人間の生き方、在り方ではないでしょうか。アブラハムは今から四千年も前の人です。仏陀よりも、孔子よりも、ソクラテスよりも、さらに一

五〇〇年ほど前の人です。恐ろしいほど昔の人です。その彼が現代の私どもに語りかけている、メッセージを発してやまないとすれば、それこそが、信頼に値する真理の声、その証しと言ってよいように思います。

ところでこうして内面的な促しに従って出で立ったアブラハムでしたが、その時点で、将来のことも、さし当たっての目標の場所も知っていなかったということは、前回も申し上げた通りです。新約聖書のヘブライ人への手紙は、そのことを次のように書いています。

信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです（一一・八）。

有名な、先週も一部を引用した聖書の言葉です。アブラハムは「行く先を知らないで出て行った」（口語訳）のです。ヘブライ人の手紙は、この出発を彼の信仰によったのだと言っています。というのも、ヘブライ人の手紙によれば、信仰とは、望んでいることをいまここで確信することであり、見えないものでも、それを事実として受け入れ、受けとめることにあるからです（一一・一）。そうした信仰がアブラハムの行動の根底に働いていた。そう考えれば、ここでアブラハムは、まさに信仰によって出で立ったと言わなければなりません。

2　約束と感謝

いま、ヘブライ人への手紙によって、アブラハムの旅立ちを、新約聖書の人たちがどのように見ていたか、少し申し上げました。新約にまで飛ばなくても、旧約聖書の中で、とくに節目節目でイスラエルが自分たちの歩みを振り返って見るときには、必ず言及されます。というのも、イスラエルは、自らの歴史を、アブラハムの召命と出立から始まったと考えていたからです。

その一つ、ヨシュア記二四章です。イスラエルの一二部族が、カナンの地で約束の土地を与えられたとき、彼らは、シケムで、改めて、次のような神の言葉を、ヨシュアから聞くのです。

イスラエルの神、主はこう言われた。「あなたたちの先祖は、アブラハムとナホルの父テラをふくめて、昔ユーフラテス川の向こうに住み、他の神々を拝んでいた。しかし、わたしはあなたたちの先祖アブラハムを川向こうから連れ出してカナン全土を歩かせ、その子孫を増し加えた・・・（二四・二～三）。

これによると、アブラハムが父テラと共にカルデアのウルを出てカナンに向かう途中住んでいた、しかも先週それを見たように、思いのほか長逗留になってしまったハランで、彼らは、その地の、イスラエルにとってはまさに異教の神々を拝んでいたというのです。

ですから主なる神の思いをそんたくすれば、ハランを離れるように、再出発して自

らの示す地に行くように神が命じられたのは、アブラハム一族が、まことの神、主を神とするように神が要求したから、と言ってよいと思います。彼らは、まことの神を神として生きるために引き出されたのです。

さてそれならアブラハムは、その生き方を変えて、まことの神を神とするようになったのでしょうか。今日の四節後半以下に示されたカナンへの旅路、さらにそれを越えてエジプトに隣接する、カナン（パレスチナ）南部ネゲブまでの旅路の記録は、そうした異教の神々を離れて旅する様子を、私どもに伝えていると言ってよいように思います。その意味でも新しい歩みがはじまったのです。

アブラムは、ハランを出発したとき七十五歳であった。アブラムは妻のサライ、甥のロトを連れ、蓄えた財産をすべて携え、ハランで加わった人々と共にカナン地方に向かって出発し、カナン地方に入った。アブラムはその地を通り、シケムの聖所、モレの樫の木まで来た。当時、その地方にはカナン人が住んでいた。主はアブラムに現れて、言われた。「あなたの子孫にこの土地を与える」。アブラムは彼に現れた主のために、そこに祭壇を築いた（四ｂ～七節）。

アブラハムが旅立ったのは七五歳のときでした。アブラハムは一七五年生きています。創世記の最初のほうに出てくる人たち、たとえばアダムは九三〇年、ノアは九五〇年というのと比べれば、族長たちの年齢は、実年齢に近づいているとは思いますが、どう考えればいいのか、はっきり言って分かりません。アブラハムが七五歳というとき聖書も高齢だと見ていることは間違いありませんが、それでも神は彼を神に仕えるため召し出したのです。

この箇所に一族の全体も簡単に描き出されています。妻と甥のロト、財産というのは、主に家畜です。それの世話をする牧童、たくさんの奴隷、それに、後のほうに親族が捕虜になったとき、三一八人の家で生まれた奴隷で訓練を受けた者を集めて派遣したとありますので（一四・一四）、全体として千人に近い規模の集団ではなかったかと思います。

シケムで神が現れ、「あなたの子孫にこの土地を与える」と約束します。この段階ではカナンはイスラエルの所有ではありません。一二部族が定着するのは、八百年ほど後のこと、紀元前一三世紀の半ばです。それゆえ、「当時、その地方にはカナン人が住んでいた」という断りを入れたのだと思います。アブラハムに神が現れます。かつて内面的な促しとして臨んだ神は、どういう仕方か分かりませんが、いっそう親しく近づいてこられた。約束の言葉を受けてアブラハムは、それに感謝し、祭壇を築きます。かくて旅路の中で、一族は、いまや神を共にあがめる群れとして形成されようとしています。

3　旅する神の民

神を共にあがめる群れとして形成される。しかし彼らはまだ旅の途中です。今日の箇所はなおさまよいつづける一族を描いています。

アブラムは、そこからベテルの東の山へ移り、西にベテル、東にアイを望む所に天幕を張って、そこにも主のために祭壇を築き、主の名を呼んだ。アブラムは更に旅を続け、ネゲブ地方へ移った（八～九節）。

ユーフラテス川の向こうハランを出たアブラハムが、どういうルートを通ったかはむろん分かりませんが、シリアのダマスコの町が、一つの重要な中継地点であったと言われています。

そこからカナンに入ります。ここに出てくるベテル、アイという地名は、彼らがカナンの中央にまで来たことを示しています。「西にベテル、東にアイを望む所」もまた、一つの重要な場所であったのでしょう。一息ついて、ここまで来たことの感謝を表すためにでしょうか、ここでも「祭壇」を築きます。更にここでは、「主の名を呼んだ」との言葉によって、最初に祭壇を築いたシケムのときよりも、神をあがめる群れとして整えられたように見えます。「主」とは、イスラエルの神の名です。神とは自分たちにとってだれか、いっそう明らかになったのです。それはカルデアのウルから一族を引き出し、ハランでの生活にけじめをつけさせ、アブラハムを世界の祝福の基とすると約束された神です。「名を呼ぶ」。言葉が役割を果たします。神の民として形成されるのです。アブラハムの旅立ちと、その旅路は、神信仰を深め、それを言葉と行為によって告白する旅にもなったことは明らかです。内面の促しに従いながら神に従う道が歩まれます。

今日の聖書箇所、アブラハムの旅の行程表を示しただけの箇所のようにも見えますが、いま申し上げたように、族長アブラハムを中心に神の民が形成されていく過程として見れば、意味深いものがあります。

更にこの箇所で、私にとって印象深く残ったのは、「旅を続け」という今日の箇所の終わり、九節にある言葉です。アブラハムはつねに旅の途上にある人でした。最後まで「寄留者」（二三・四）として生きた人と言ってもよいと思います。改めて思わせられるのは、アブラハムをはじめとしてイサク、ヤコブなと、イスラエルの父祖はみなそうであったことです。ヘブライ人の手紙に、次のようにあります。

この人たちはみな、信仰を抱いて死にました。約束されたものを手に入れませんでしたが、はるかにそれを見て喜びの声を上げ、自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公に言い表したのです（一一・一三）。

祝福の源、基としてのアブラハムの使命は、またイスラエルの使命であり、教会の使命でもあります。教会は旅する教会です。世を旅する神の民です。この世にどっぷりつかった団体ではない。何よりイエスを救い主として世に証しし、イエスがそうであったように世に仕え、終わりの栄冠を目ざして歩む群れです。「わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる（Ⅰコリ一三・一二）」。その時まで「信仰と、希望と、愛」に生きようという使徒パウロの勧めを、私どももしっかり聞いて歩みたいと思います。

（二〇二〇・六・一四）